

「2025年7月5日に大災害が起きる」という、にわかに信じがたい都市伝説が一部で話題となっていました。幸い何事もなく過ぎ去り、こうして無事に8月号を発行できることに、まずは感謝を申し上げます。あらためて、平穩であることの尊さ、そして備えることの大切さを実感するきっかけになった方も多かったのではないのでしょうか。

さて、今月号も実に多彩な内容となりました。巻頭では「慰霊の日」にあたって、沖縄戦で命を落とされた医療従事者への献花・焼香の報告が寄せられています。静かな青空の下、私たちの命を守る仕事の意味を、あらためて胸に刻むひとときとなりました。戦後80年を迎える今、次世代に伝えるべき「医療と平和の接点」が、そこには確かにありました。

また、「医師会立看護師等養成所会議」では、全国各地の医師会が抱える看護教育の危機と、そこに立ち向かう工夫と熱意が数多く紹介されました。特に、福井や群馬、大阪の事例には、どの地域も「人を育てる」ことに対する本気の姿勢がにじんでおり、大変刺激を受けました。どの報告にも共通していたのは、「学生の可能性を信じ、看護の本質を伝える教育を」という真摯なメッセージでした。どんなに制度が変わろうとも、教育と医療は「人の想い」が支えているという原点を感じさせてくれます。

「第19回 男女共同参画フォーラム in 福島」も、まさに“熱さ”と“あたたかさ”が入り混じった内容でした。女性医師や男性医師、家族を大切にしながら働く姿、それぞれの立場から語られたリアルな声が印象的でした。フォーラムの締めくくりでの「来年は沖縄で“チムドンドン”しましょう！」という呼びかけは、主催県としての我々の士気をぐっと高めてくれました。令和8年4月4日、首里城のふもとで、皆さんと語り合える日を心待ちにしています！

そして、今月号も「緑陰随筆」「診療雑感」など、日常の中でふと立ち止まって考えさせられる投稿が満載でした。中には「牛井と心の回復」など、タイトルだけで思わず開きたくくなるような珠玉の一編も。医療に関わる者としてだけでなく、一人の生活者としてのまなざしが光る文章が多く、誌面の豊かさを実感しております。

平和も、教育も、地域医療も、そして“日々の暮らし”も、すべては「人」があってこそ。そんなことを、今月号の一つひとつの記事が教えてくれているように思います。

来月もまた、皆さまの声と想いをお届けできますように。

広報委員 稲富 仁

